

2025年2月9日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教26「神の子の声を聞く」

エゼキエル37：1～6、ヨハネ5：25～30

「わたしは自分では何もできない」（30節）とイエスさまは言われます。イエスさまは、まことの神さまですから、全能であって、何でもおできになるとわたしたちは考えます。しかし今日の箇所ではイエスさまはご自分では何もできないとおっしゃる。それは単独ではできないということです。一人ではできないけれども父なる神さまとのつながりの中でできる。ここで強調されていることは何よりそのつながりです。聖書の信仰においては、どこまでもこの神さまとのつながり、関係性が問われています。

わたしたち人間が、神さまにかたどって造られた（創世記1：27）ことは、神さまとのつながりに生きるものとして造られていることに他なりません。また命の息を吹き入れられた（創世記2：7）ことも、わたしたちの命の源泉は神さまであって、そのつながりを失うならば、わたしたちは生きられないことが示されています。ところが、人間はそうのように造られていながらも、神さまとのつながりを自ら捨ててしまいました。神さまとの約束を破り、その関係は破綻してしまいました。神さま抜きで生きていく。その結果が今の世界ではないでしょうか。戦争があります。対立、分断があります。それは身近な人間同士の関係にも現れてきます。誰の言葉も忠告にも耳を貸さず、相手のことを考えずに、独り善がり、身勝手に行動する。どこまでもわたしたちは自分中心です。自分の考えが一番であり、それを人にも押し付ける。相手もそれを望んでいると勝手に思い込んでいるところがあります。

そのようにつながりを捨て、ワンマンに生きていこうとするわたしたちが、もう一度、そのつながりに生きることができるようになるためにイエスさまは来られました。つながることを教えるためにイエスさまは「自分では何もできない」自ら一人では何もできない者となられます。一人では何もできないからこそつながる必要がある。そのためにイエスさま自ら何もできない者となられた。それはまことの人としての弱さです。神さまから離れ、孤立しているわたしたちの弱さ、罪の中へ降りてきてくださった。そしてついにはその弱さを身に帯びて十字架で死んでくださいました。死はまさに孤独の極みです。弱さの極みです。一切のつながりが絶たれる。そこにイエスさまは身を置かれました。

けれどもそれだけではありません。イエスさまは三日目によみがえられました。それは孤独の中から、わたしたちをつながりに生きる新しい命へ移してくださったということです。それが十字架とよみがえりの出来事が示す救いです。今日のところにもよみがえりのことが言われています。「驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行なった者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ」（28～29節）ここには終末における審判が描かれています。いずれにしても、それは神さまの御前に立つことです。わたしたちは、神さまとのつながりの中に招かれ導かれていくのです。

ここを読みながらヨハネ福音書の第15章にぶどうの木の譬えを思い起こしました。「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながって

いなければ、実を結ぶことはできない・・・わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」(15:4~5) ここにも「何もできない」とあります。「自分では何もできない」けれども、つながってさえいれば実を結ぶのです。できるかできないかではない。つながっているかどうかなのです。むしろ、つながりを生きるためにはできないでもいい。できない方がいいと言っているのではないか。できないからこそ、神さまの恵みがそこに注がれる。パウロが「わたしは弱いときにこそ強い」(IIコリント12:10)と言いました。

今日の箇所は、このパウロと同じ響きがあります。イエスさまが「わたしは自分では何もできない」とおっしゃる時、それは神さまとのつながりの中で言われています。ご自分が無力になることで、神さまが働いてくださる。わたしを通して神さまが働かれる。そのためにわたしは何もできない。カール・バルトは「空洞」と言います。要するに空っぽであること。わたしが空洞であるから神さまが働いてくださるのです。信仰はそれを求めています。

かつての日本の教会の指導者に逢坂元吉郎という人がいます。逢坂は、受肉した神の子キリストとのつながり、一体性を強調した神学者の一人です。54歳の時に新聞で神道系の宗教団体を批判したことから暴行を受けて重傷を負います。またそれがきっかけでカリエスを患い3年に及ぶ闘病生活をされました。しかしこの試練の体験が彼の信仰をより深めます。彼は次のように述べています。「今日のプロテスタントは人の側から信じている。人間論が土台であって、キリスト論に立とうとしない。しかし信仰の主体は我々ではなく、キリストご自身であらねばならぬ」ここは信仰の急所です。

わたしたちは自分の力で信じている、信仰が成り立っていると考えているかもしれない。けれどもそうではない。むしろ自分は無力でいい。何もなくていい。イエスさまに結ばれ、イエスさまに満たされる。そこに信仰が生じる。逢坂は、大病を患い、本当に自分が何もなくなった時に、そのことに気づかされたのかもしれませんが、『ハイデルベルク信仰問答』の問1「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。答 わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです」ここにもその信仰が表されているように思います。そのように完全にイエスさまに飲み込まれてしまう。イエスさまのものとされ、イエスさまと一つになっていく。その時に本当の意味でわたしたちは神さまとのつながりに生きる者とされるのです。

「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である」(25節)とあります。罪の中に死んでいたわたしたちのところに、イエスさまは来てくださいました。そして「わたしのところに来なさい」と声をかけてくださいます。その声が聞こえるでしょうか。自分のこと、世の中のことでいっぱいになっているとイエスさまの声は聞こえませんが。順風満帆の時は満たされてしまっただけで聞かれません。けれどもわたしたちが弱っているとき、何かにつまずいて倒れそうになっているときこそ、神の子の声が聞こえます。

天の父よ。人生において、自分の不甲斐なさ、弱さを嘆くことがあります。けれどもその時こそあなたのみ声を聞く時であることを悟らせてください。あなたの恵みが注がれるために、むしろ自分の弱さを誇るものとさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。